

連載コラム

みずき野と
その周辺の
植物と昆虫

第12回
春の木の花



本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫

(12) 春の木の花

春の彼岸の頃から、木の花は次々と咲き、まさに春爛漫の季節がやってきます。ウメとサクラについては既に述べましたが、この季節はほかにもツバキがひっそりと、コブシの大木が雄大に花を咲かせます。つづいてジンチョウゲ、ユキヤナギ、レンギョウ、ボケ、アセビ、ドウダンツツジなど、小さな木にも花が次々と咲いていきます。里山にはニワトコの白い花が泡立つように咲き、やがて新緑の頃になると、ツツジ、ヤマボウシや、フジやキリの花が咲く季節がきます。

今回は、これら春の木の花のいくつかについて書いてみます。

(1) ツバキ

ツバキの仲間には、ヤブツバキ、ユキツバキ、サザンカ、トウツバキ、ワビスケなどがあり、多くの園芸品種もあります。これらの中で、最も普通に見られるのは、ヤブツバキで、太平洋側一帯に分布しています。単にツバキといえばヤブツバキを指します。



ヤブツバキ
3月下旬
さくらの杜公園

ツバキは古代から日本人に好まれた植物で、万葉集にもツバキを詠み込んだ歌が9首あります。

巨瀬山（こせやま）の つらつら椿 つらつらに



見つつ俣はな 巨瀬の春野を

坂門人足（さかとのひとり）（万葉集54）

「巨瀬山」は、奈良県御所市古瀬にある山。「つらつら椿（列列椿）」は、数多く並んで咲いているツバキ。そのあとの「つらつら」は「つくづく」の意。「巨瀬山のつらつら椿をつくづく見ながら巨瀬の春野を俣びましょう」

紫は 灰指すものぞ 海石榴市（つばいち）の
八十の衢（ちまた）に逢へる 子や誰



作者不詳（万葉集3101）

「海石榴市」は奈良県桜井市三輪附近にあった古代の市場。桜井市のホームページには、「海柘榴市は人々が物々交換する市道（いちじ）であり、後世の市場のおこりであります。和名を「椿市」とする。このあたり一帯は、古代の結婚の場となった「歌垣（うたがき）」が行なわれていた。春秋の季節には青年男女が集まってきて、必死に恋のかけあい歌を投げ合っていた」と述べられています。海柘榴市という名は、そのあたりにツバキが植えられていたか、自生していたかによるものと思われる。「紫は灰指すものぞ」はツバキの灰が紫染めに使用されたため、椿に掛けた言葉で、歌の主旨とはあまり関係がありません。上の歌は、「海石榴市の四方八方の路に通じる街角で出会った娘さん、貴女はいったい誰なの」。女性に名を尋ねるのは求婚を意味するのだそうです（桜井満訳注 万葉集(中) 旺文社文庫）。

一方、ツバキといえば、静寂の森に咲くヤブツバキの巨木を思い浮かべます。私はそのようなヤブツバキに孤独で高潔なすがたをイメージするのですが、漱石の小説「草枕」の中で、主人公の画家は、まっ赤に咲いてぼとりぼとり落ちるツバキの花に不吉な妖しさを感じます。花が首ごと落ちるという理由で、ときには縁起の悪い花とされますが、ぼとりと落ちるのは、受粉が済んで不要になった雄しべの付いた花卉で、首ではありません。実を育むために必要な行為です。

地面に落ちた
ヤブツバキの花
(花弁と雄しべ)
3月下旬
さくらの杜公園



さくらの杜公園や、町内の遊歩道にはヤブツバキがたくさん植えられています。そのほか、ピンクのオトメツバキや、白や斑入りの花をつけるいろいろな園芸品種も見るすることができます。



さくらの杜公園のツバキ園芸品種の一部
3月下旬

(2) コブシ

コブシはモクレンに似た植物ですが、モクレン（シモクレン、ハクモクレンなど）は中国原産で、日本では園芸植物です。これに対し、コブシは在来種で、守谷の里山にも、自生したと思われる大木を見ることができます。また、大木にはなっていませんが、さくらの杜公園や町内の遊歩道でも育っております。



里山のコブシ
3月下旬
本町地区



コブシの花
3月下旬
本町地区

コブシの花は3月中旬頃に開き始め、すぐに満開になります。花は散りやすく、鑑賞する期間はごく限られます。花が終わると果穂（実の集まり）が生長します。牧

野富太郎は、この果穂のかたちが人のこぶしの形に似ているので、コブシの名が出たのではないかと推測しています（「牧野富太郎植物記5」 あかね書房）。

(3) アセビ

アセビはツツジの仲間で、花はドウダンツツジに似ていますが、ドウダンツツジより花穂が長く、房になって垂れ下がります。神経中枢を麻痺させる有毒物質を含む植物なので、注意せねばなりません。その花は可憐で美しいものです。みずき野周辺では、自生のアセビは見たことがありませんが、栽培されているものは見ることができます。原種の花は白ですが、有色の花をつける園芸品種もあります。



アセビ
3月下旬
本町地区

花房が垂れて咲く可憐なアセビ（アシビ、馬酔木）の花も、古代人に愛でられた花です。万葉集にもいくつかの歌がありますが、中でも心打つのは大津皇子（おおつのみこ）と同母の姉大来皇女（おおくのひめみこ）の歌。大津皇子は継母持統天皇により、謀反の名目で処刑され、二上山に葬られますが、大来皇女は悲しみの中で次の2首をつくりまします。

うつそみの 人にあるわれや 明日よりは
二上山を 兄弟（いろせ）とわが見お
(万葉集 165)

磯のうへに 生（お）ふる馬酔木を 手折らめど
魅すべき君が ありと言はなくに (同 166)



歌の意はそれぞれ、「生きている私は、明日から、二上山を弟と見よう」、「磯の上に咲くアセビを手折ろうとしている。それを見せたい人はもういないというのに」。

大来皇女は、伊勢の斎宮だったのですが、この事件によって解任されて都にかえります。後者の歌には次のような注がつけられています。

「右一首（ここでは下）、今案（かむが）ふるに、移し葬（はぶ）る歌に似ず。けだし疑はくは、伊勢神宮より京に帰る時、路のへに花を見て感傷哀咽（あいえつ）してその歌を作るか。」

平安時代以降は、アセビを愛でることはなくなりましたが、明治以降になると、アセビの花としての美しさが再認識されるようになりました。明治36年、伊藤左千夫らは短歌誌「馬酔木」を発刊しています。その後もアセビを詠んだ優れた詩歌が多くあります。

のぼり来（こ）し 非叡（ひえい）の山の 雲にぬれて

馬酔木（あしび）の花は 咲きさかりけり

斎藤茂吉

来しかたや 馬酔木咲く野の 日のひかり

水原秋桜子

（4）ニワトコ

ニワトコ 4月下旬 本町地区



4月半ばを過ぎると、里山のあちこちにニワトコの白い花が見られます。どちらかといえば地味な花ですが、庭園にも栽培され、活け花の材料にも使われます。この植物も古代から人に知られた植物です。



ニワトコの実
6月中旬
本町地区
食べてみたが、
甘みはなく、
不味かった

古事記からの引用ですが、神武天皇より第19代に数えられる允恭天皇（いんぎょうてんのう）の皇子、木梨の軽王（きなしのかるのみこ）と軽大郎女（かるのおおいらつめ）またの名を衣通王（そとほしのおほきみ）は同母の兄妹です。この兄妹が恋に落ち、密通してしまいます。この時代は近親婚も多く、異母の子の間の婚姻は認められていますが、さすがに同母の子の間の婚姻は認められていません。禁を犯した軽王は捕えられて、伊余の湯（現道後温泉）に流されます。軽大郎女は堪え難い恋慕によって軽王を追って行きますが、そのときに詠んだ歌。

君が往き け長くなりぬ 山たづの 迎へを行かむ 待つには待たじ

そして二人は再会したのち、互いに歌を交換して、死んでしまいます。

上の歌の意は「貴方が行ってしまってから長い日数が経ってしまった。もうとても待ってられない。迎えにゆきましょう」。この歌の「山たづ」には注釈があって、「ここに山たづと云ふは、これ今の造木（みやつこぎ）なり」と書かれています。造木は、ニワトコの古称です。この歌の「山たづの」は「迎へ」にかかる枕詞（まくらことば）で、ニワトコの葉は向かいあっていることから「迎へる」を意味するのだそうです。

枕詞として使うぐらいですから、ニワトコは古代人にはなじみ深い植物だったのでしょう。

(5) ヤマボウシ

さくらの杜公園には、ヤマボウシが植えてあり、5月に入ると白い花が目立ちます。4枚の白い花びらのように見えるのは、実は苞葉で、苞葉の上に見える丸い緑の部分は花が集合したものです。写真の花はまだつぼみの状態で、やがて微細な淡黄色の花が咲きます。ヤマボウシは「山法師」の意味で、苞葉と花の部分を比叡山の僧兵の頭と白い頭巾に見立てた名だそうです（北村四郎・村田源「原色日本植物図鑑 木本篇」 保育社）。



ヤマボウシ
5月上旬
さくらの杜公園

8月下旬ごろ、実が赤く熟します。食べられますが、うす甘く、ちょっと変わった味です。



ヤマボウシの実
8月下旬
さくらの杜公園

(6) フジ

フジもまた、古代から現代まで、日本人に好まれる花木です。みずき野周辺の里山にも、4月下旬から5月にかけて、華麗なフジの花がみられます。在来のフジにはノダフジ(通称フジ)とヤマフジの2種があります。両種ともつる性の木本ですが、ノダフジは反時計回りに、ヤマフジは時計回りに、隣接する木に巻きついて生長していきます。ノダフジもヤマフジも日本固有種で、ノダフジは本州全体と四国、九州に、ヤマフジは兵庫県以西の本州と四国、九州に分布しています。京都、奈良、滋賀県にもヤマフジはありませんので、万葉集などの古歌に歌われるフジはほとんどノダフジと考えていいようです。

源氏物語では内裏の飛香舎(ひぎょうしゃ 通称藤壺)に住む美しい藤壺中宮のイメージから高貴な花という印象があり、また長唄による舞踊「藤娘」に表現されるような洗練された華やかさがあります。現代でも、藤棚の満開のフジを見ると、その高貴な色と華やかさに感動をおぼえます。

しかし、高貴で華やかな花と見られる一方、里山に咲く野生のフジには、また違った雰囲気があります。里山に根付き、春から初夏へと移り変わる季節を彩るなつかしい花です。



みずき野から守谷駅方面に向かう道路から
見えるフジの大木
4月下旬



上の写真のフジを
望遠で撮ってみた

ひるまはげんげと藤のむらさき。
夜は梟のほろすけほう。



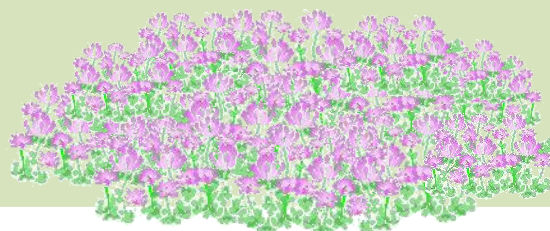
上は草野心平の詩「上小川村」の冒頭の部分です。昔は十六七軒の百姓部落だったという故郷に帰ってきた草野心平は、こんな言葉で、帰郷の感動を表現しています。上小川村は現在の福島県いわき市小川町です。

(中略) その頃ここで。
白井遠平が生れ育った。
櫛田民蔵が生れ育った。
今も變なのがすこしはみる。
人のいい海坊主みたいのにのろんとした橋本千之助も生きている。

ひるまはげんげと藤のむらさき。

夜は梟のほろすけほう。

(以下略)



フジの花の咲く里山は、新緑に包まれ、一年でもっとも心とお候です。



2015年4月
本吉 總男